

科目ナンバー	SEM-3-003-ky			科目名	課題演習I (鈴木)		
教員名	鈴木 鉄忠			開講年度学期	2020年度 前期	単位数	2
概要	<p>本演習では、群馬地域やイタリア等の国内外のフィールドに学びながら、「スローな」(持続可能で身の丈にあった)地域づくりをテーマにします。それによって、現代社会の「当たり前」「これが正しい」を考え直し、別の方法で考える想像力／創造力と、実際に行動する力を身につけることを目標にします。</p> <p>これまでの社会は、「成果」「成功」「成長」という1つのゴールを目指してひた走ってきました。そうした「足し算による進歩」は、輝かしい結末というより、「気候変動」「少子高齢化」「過疎化」「無縁社会」といった大きな問題から、新たな「貧困」「格差」「排除」、そして「心の病」「依存症」「孤独」といった一人一人の生活危機まで及んでいます。こうした「正解のない問題」に答えるためには、「〇〇〇(ex. 車やスマホやスタバ)がなければ×××ができない」という「当たり前」「思い込み」を一度棚上げて、「〇〇〇がなくても△△△はできる」という「引き算による進歩」へ発想転換する柔軟さと、別の選択肢を考え出して行動に移る力が重要になってきます。ではどうしたらよいのでしょうか？</p> <p>「よりゆっくり、より深く、より柔らかく」――イタリアの環境活動家アレックス・ランゲルは、「正解のない問題」に対する心構えをこのように表現しました。なかでも「よりゆっくり」という「スロー」は、「遅さ」だけでなく、「持続可能であること」や「適度なサイズ」という意味を含み、「スローフード」「スローシティ」「スローライフ」といった新たな取り組みと結びつき、スピード重視の社会とは別の発想と行動を創造するキーワードになっています。</p> <p>演習の進め方は、前期に「スロー」に関する本を輪読します。またフィールドワークを実施予定のため、「フィールドワークの方法」I, IIの受講を強く勧め、フィールドから学ぶ力を磨くことを重視します。夏期に、前橋赤城「スローシティ(チッタスロー)」での合宿型フィールドワークを実施予定です。後期は、「スロー」をテーマとしたゼミ論文(1万字以上)を作成します。また地域のイベントにも積極的に参加してほしいと思います。</p>						
到達目標	<p>到達目標は、4つあります。</p> <p>①本を読み解く読解力だけでなく、本から現実を読み解く洞察力を身につけること、②自分自身の問題関心を深め、それを言語化し、論文やプレゼンテーションに伝える表現力を身につけること、③現場の人やモノから学ぶフィールドワークの力をつけること、④他の人々と対話し、力を合わせるコミュニケーションと協同する能力を身につけること。</p>						
「共愛12の力」との対応							
識見		自律する力		コミュニケーション力		問題に対応する力	
共生のための知識	○	自己を理解する力	○	伝え合う力	○	分析し、思考する力	○
共生のための態度	○	自己を抑制する力	○	協働する力	○	構想し、実行する力	○
グローバル・マインド	○	主体性	○	関係を構築する力	○	実践的スキル	○
教授法及び課題のフィードバック方法	学内外のプロジェクト、文献購読、論文執筆をめぐる受講生の作業とディスカッションを中心に進めます。担当教員は、受講生同士の学びを促したり、深めたりするための「つなぎ役」(メディエーター)として議論に参加します。発表や議論へのコメントや助言については、ゼミ内外の時間を通じて適宜フィードバックしていきます。						
アクティブラーニング		サービスラーニング		課題解決型学修			
受講条件 前提科目	この課題演習では、文献や資料を「読み」、必要な情報を「探し」、事例と関連する現場を「歩き」、現場の人の話を「聴き」、グループで「話し合い」、レポートに「書き上げる」ことで、社会で必要とされる総合的な応答力を身に着けることを目標とします。そのため「ちょっと大変」と感じるかもしれませんが、社会で活躍する「将来の自分への投資」と考え、積極的に演習に取り組むことを求めます。						
アセスメントポリシー及び評価方法	学内外のプロジェクトへの参加の「質」50%、複数の課題提出の状況と内容50%によって、総合的に評価します。						
教材	辻信一著、『スロー・イズ・ビューティフル――遅さとしての文化』、平凡社ライブラリ、2004年、1080円(税込)、ISBN:9784582765014を予定しています。書店などで各自で入手し、第1回の演習のときに持参してください。						
	<p>以下は参考図書および副読本として、図書館や書店で入手するなどして、積極的に予習復習に役立ててください。なお授業のなかでこれらの文献を活用することがあります。</p> <p>「スロー」と「現代社会」については、以下を参照。</p> <p>E.F.シューマッハー、『スモール・イズ・ビューティフル――人間中心の経済学』(小島慶三／酒井懋訳)、講談社学術文庫、1986年</p> <p>C.ダグラス・ラミス、『経済成長がなければ私たちは豊かになれるのだろうか』平凡社、2004年</p>						

参考図書	<p>H.D.ソロー(2016)『ウォールデン 森の生活 上下』今泉吉晴訳、小学館文庫 小野塚知二、『経済史いまを知り、未来を生きるために』有斐閣、2018年 辻信一、『スローライフ100のキーワード』弘文堂、2003年 E.ショイルマン、『バパラギはじめて文明を見た南の島の酋長ツイアピが話したこと』(岡崎照男訳)、SBクリエイティブ、2009年 A.ダンサ／E.トゥルボヴィッツ、『ホセヒムカ 世界で一番貧しい大統領』(大橋美帆訳)、角川文庫、2016年 Think The Earth(2018)『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』紀伊国屋書店</p> <p>「スロー」と「食べ物」については、以下を参照。 島村奈津／辻信一、『そろそろスローフード』、大月書店、2008年 C.ベトリニ、『スローフードの奇跡——おいしい、きれい、ただし』(石田雅芳訳)、三修社、2009年 G.リッツァ、『マクドナルド化する社会』(正岡寛司監訳)、早稲田大学出版部、1999年</p> <p>「スロー」と「まちづくり」については、以下を参照。 吉本哲郎(2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 J.ゲール(2014)『人間の街—公共空間のデザイン』北原理雄訳、鹿島出版会 島村奈津(2013)『スローシティー世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』光文社新書 陣内秀信、『イタリアの街角からスローシティを歩く』弦書房、2010年 松永安光／徳田光弘(2007)『地域づくりの新潮流』彰国社 宗田好史(2012)『なぜイタリアの村は美しく元気なのか—市民のスロー志向に応えた農村の選択』学芸出版社 久繁哲之介(2008)『日本版スローシティー地域固有の文化・風土を活かすまちづくり』学陽書房</p>
------	--

内容・スケジュール	<p>01回 ガイダンスなぜ「スロー」か? 演習の進め方 輪読担当、地域プロジェクトのスケジュール 02回 「スローな地域づくり」に関する文献購読① 03回 「スローな地域づくり」に関する文献購読② 04回 「スローな地域づくり」に関する文献購読③ 05回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業① 06回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業② 07回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業③ 08回 中間考察とリフレクション 09回 「スローな地域づくり」に関する文献購読④ 10回 「スローな地域づくり」に関する文献購読⑤ 11回 「スローな地域づくり」に関する文献購読⑥ 12回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業④ 13回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業⑤ 14回 「スローな地域づくり」のプロジェクトに関する議論と作業⑥ 15回 まとめ 文献購読と地域プロジェクトに関する期末レポートの提出</p>
-----------	---

Number	SEM-3-003-ky	Subject	Junior Specialty Seminar I		
Name	鈴木 鉄忠 (Suzuki Tetsutada)	Year and Semester	First semester for 2020	Credits	2
Course outline	<p>In this seminar, with the theme of "slowness", we thoroughly examine the "problem without answer" generated by modern society, unraveling various complicated intertwined problems, and putting "response" different from "correct answer". The way to proceed is to read all the texts in the previous term. Participants must always read and report on books, deepen their concern concerning themselves with "slowness and modern society", prepare for fieldwork during the summer vacation period and writing seminar for later semester.</p>				